

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 文化資源論講座 無形文化資源論分野
大坪 利彦

【論文題目】

近代日本における都市と大衆文化の諸相－国民国家の形成と展開を背景として－

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、近代世界における国民国家と文化・表現の間の不可分で密接な関係への認識を前提として、近代日本の国民国家の形成と発展のプロセスが、幕末維新期から昭和期に至る各時期の日本語表現（日本近代文学）の展開に及ぼした多様な影響について、通時的な検討を行った論考である。その際に、近代日本における都市化と大衆化の進行状況という観点も併せて導入しながら、各時期の代表的な表現者を主要な考察の対象として、新聞・雑誌等の各種メディアの変容をも視野に収めつつ考察が展開されている。

本論文全体は、第Ⅰ部「世界システムとしての近代国民国家」第Ⅱ部「短歌の近代化と国民国家」第Ⅲ部「都市大衆と国民国家」の三部八章から構成されている。第Ⅰ部では、最初に近代日本の表現と文化の展開を検討する上での国民国家の視点からのアプローチの重要性が提起される。その上で幕末維新期から明治期を対象として、幕末維新期における日本国内の公論の形成と風説留、明治前期の新聞メディアの発展、『萬朝報』の海外翻案小説、国木田独歩と明治期自然主義の形成などの広汎な考察対象が、同時期のナショナリズムの発展と「国語」の展開との関係において検討される。さらに特に夏目漱石を対象として、その小説構造と表現から看取される同時期の帝国日本の植民地をめぐる言説との関係が考究されている。

第Ⅱ部では、近代短歌の形成と発展におけるナショナリズムとの交錯が明治期から大正期を対象として検討される。そこでは、近世以来の伝統的詩歌から近代短歌が成立する過程で重要な役割を果たした明治期中期以降の短歌結社と結社雑誌の性格が分析され、中でも近代短歌の第二世代としての北原白秋と若山牧水の二人の歌人の明治末期から大正期への動向が個別に考察される。特に若山牧水の歌人としての活動が詳細に検討され、この第二世代の歌人と伝統的詩歌の主体である御歌所の系譜とが交錯する中で、同時期の文化的ナショナリズムをも深く内包した形で近代短歌の平準化が達成されたと分析されている。

第Ⅲ部においては、大正期から昭和初期にかけての都市化と大衆化の進展する時代における表現と文化に関する各種の変容が考察されている。この時期の円本ブームを含めた出版資本主義の進展と読書の大衆化現象との関係が分析され、また近代都市を方法的に表現対象とした都市文学と呼ぶべきカテゴリーの形成や大衆文化メディアの進展に関して、同時期の川端康成の小説を中心として検証が行われる。また、そのような近代日本の都市をめぐる言説の一方で、故郷なるものが表現対象として可視化され表出されていく過程と近代ナショナリズムの関係について、特に牧水の短歌についての考察を通して示されている。

本論文は、第一に、近代日本の文化と表現について国民国家の形成と展開の視点から統一的にアプローチを行い、その通時的な記述を試みた点で新たな研究視点を含んでいる。第二に、都市化と大衆化という観点を各時期の表現と文化の解釈に体系的に導入する分析方法は、今後の同種の研究に対しても豊かな示唆に富む。第三に、各章での表現者とそのテキストに関する個別の分析は独創的な観点を多く含み、特に若山牧水を中心とする近代短歌史の分析は従来指摘がない多くの視点を示す。本論文はその考察の対象の広汎さゆえに一層の分析の深化が必要と思われる部分を一部含むが、総体として十分に評価に値する。

以上の通り、本論文は日本の近代文学と文化の研究において新たな知見と展望をもたらすものであり、博士（文学）の学位にふさわしいと認められる。

【最終試験の結果の要旨】

学位論文申請者は、平成22年1月19日(火)に実施した口頭試問において、博士學位論文の内容に対する審査委員の質疑に対して、適切な応答を行った。

また平成22年1月23日(土)に開催された学位論文発表会において、博士學位論文の主旨についての確かな発表を行い、これに対する質疑に対しても適切に応答した。

これらにより、当該研究テーマについての博士の学位にふさわしい学力及び関連領域に関して十分な知識を備えていることが確認された。学位論文審査の結果とあわせて、申請者に博士(文学)の学位を授与することができると判断する。

【審査委員会】

主査 坂元 昌樹
委員 小松 裕
委員 三澤 純
委員 森 正人
委員 福澤 清